

## 校異源氏物語・夕かほ

六条わたりの御しのひありきのころ内よりまかて給なかやとり到大式のめとのいたくわつらひてあまになりけるとふらはむとて五条なるいゑたつねておはしたり御くるまいるへきかとはさしたりければ人してこれ光めさせてまたせ給ける程むつかしけなるおほちのさまをみはたし給へるにこのいゑのかたはらにひかきといふものあたらしうしてかみははしとみ四五けむはかりあけわたしてすたれなともいとしろうすゝしけなるにおかしきひたいつきのすきかけあまたみえてのそくたちさまよふらむしもつかたおもひやるにあなかちにたけたかき心地そするいかなるものゝつとへるならむとやうかはりておほさる御くるまもいたくやつしたまへりさきもおはせ給はすたれとかしらむとうちとけ給てすこしさしのそきたまへれはかとはしとみのやうなるをしあけたるみいれのほとなくものはかなきすまひをあはれにいつこかさしてとおもほしなせはたまのうてなもおなしこと也きりかけたものにいとあをやかなるかつらの心ちよけにはひかゝれるにしろき花そおのれひとりゑみのまゆひらけたるをちかた人に物申とひとりこち給をみすいしんついゐてかのしろくさけるをなむゆふかほと申侍はなのなは人めきてかうあやしきかきねになんさき侍けると申すけにいとこいゑかちにむつかしけなるわたりのこのもかのもあやしくうちよろほいてむねくくしからぬのきのつまなどにはひまつはれたるをくちをしの花の契やひとふさおりてまいれとのたまへはこのをしあけたるかといりておるさすかにされたるやりとくちにきなるすゝしのひとへはかまなかくきなしたるわらはのおかしけなるいてきてうちまねくしろきあふきのいたうこかしたるをこれにをきてまいらせよ枝もなさけなけなめる花をととらせたれはかとあけてこれ光のあそんいてきたるしてたてまつらすかきをきまとはし侍ていとふひんなるわさなりやものゝあやめみ給へわくへき人も侍らぬわたりなれとらうかはしきおほちにたちおはしましてとかしこまり申すひきいれており給ふこれみつかあにのあさりむこのみかはのかみむすめなとわたりつとひたるほどにかくおはしましたるよろこひをまたなきことにかしこまるあま君もおきあかりておしけなき身なれとすてかたくおもふたまへつる事はたゝかく御まへにさふらひ御らむせら

るゝことのかはり侍なん事をくちおしくおもひたまへたゆたいしかといむことのしるしにのみかへりてなんかくわたりおはしますをみたまへ侍ぬれはいまなむあみた仏の御ひかりも心きよくまたれ侍へきなときこえてよはけになく曰ころおこたりかたくものせらるゝをやすからすなけきわたりつるにかくよをはなるゝさまにものしたまへはいとあはれにくちをしうなんいのちなかくてなをくらゐたかくなどみなし給へさてこそこゝのしなのかみにもさはりなくむまれ給はめこの世にすこしうらみのこるはわろきわざとなむきくなとなみたくみての給かたほなるをたにめのとやうのおもふへき人はあさましうまをにみなすものをましていとおもたゝしうなつさひつかうまつりけん身もいたはしうかたしけなくおもほゆへかめれはすゝろになみたかちなりこともはいとみくるしとおもひてそむきぬるよのさりかたきやうに身つからひそみ御らむせられ給とつきしろひめくはす君はいとあはれとおもほしていはけなかりけるほどに思へき人くゝのうちすてゝものし給にけるなこりはくゝむ人あまたあるやうなりしかとしたしくおもひむつふるすちは又なんおもほえし人となりてのちはかきりあれはあさゆふにしもえみたてまつらす心のまゝにとふらひまうつる事はなけれと猶ひさしうたいめむせぬ時は心ほそくおほゆるをさらぬわかればなくもかなとなんこまやかにかたらひ給てをしのこひ給へるそてのにほひもいと所せきまてかほりみちたるにけによにおもへはをしなへたらぬ人のみすぐせそかしとあま君をもとかしとみつることもみなうちしほたれけりすほうなと又またはしむへき事などをきてのたまはせていて給とてこれみつにしそくめてありつるあふき御らむすれはもてならしたるうつりかいとしみふかうなつかしくておかしうすさみかきたり

心あてにそれかとそみるしら露のひかりそへたるゆふかほの花そこはかとなくかきまきはしたるもあてはかにゆへつきたれはいとおもひのほかにおかしうおほえ給これみつにこのにしなるいゑはなに人のすむそとひきゝたりやとのたまへはれゐのうるさき御心とはおもへともえさは申さてこの五六日こゝに侍れとはうさの事をおもふ給へあつかひはへるほとにとりの事はえきゝ侍らすなどとはしたなやかにきこゆれはにくしとこそ思たれなされとこのあふきのたつぬへきゆへありてみゆるをなをこのはたりの心しれらんものをめしてとへのたまへはいりてこのやとよりなるおのこをよひてとひきくやうめいのすける人のいゑになんはへりけるおとこはゐ中にまかりてめなんわかく事このみではらからなと宮つかへ人にてきかよふと申くはしき事はしも人のえしり侍らぬ

にやあらむときこゆさらはその宮つかへ人なりしたりかほにものなれていへるかなとめさましかるへききはにやあらんとおほせとさしてきこゑかゝれる心のにくからすゝくしかたきそれるのこのかたにはをもらぬ御心なめるかし御たたうかみにいたうあらぬさまにかきかへ給て

よみてこそそれかともみめたそかれにほのくみつる花のゆふかほありつるみすいしんしてつかはすまたみぬ御さま也けれといとしるくおもひあてられ給へる御そはめをみすくさてさしおとろかしけるをいらへたまはてほとへけれはなまはしたなきにかくわさとめかしければあまへていかにきこえむなといひしろふへかめれとめさましとおもひてすいしんはまいりぬ御さきのまつほのかにていとしのひていて給ふはしとみはおろしてけりひまくよりみゆるひのひかりほたるよりけにほのかにあはれなり御心さしの所には木たちせんさいになへての所にすいとのかにこゝろにくくすみなし給へりうちとけぬ御ありさまなどのけしきことなるにありつるかきねおもほしいてらるへくもあらずかしつとめてすこしねすくし給てひさしいつるほとにいてたまふあさけのすかたはけに人のめてきこえんもことほりなる御さまなりけりけふもこのしとみのまへわたりし給ふきしかたもすき給けんわたりなれとたゝはかなきひとふしに御心とまりていかなる人のすみかならんとはゆきゝに御めとまり給けりこれ光日ころありてまいれりわつらひ侍人猶よはけに侍れはとかくみたまひあつかひてなむなときこえてちかくまいりよりてきこゆおほせられしのちなんとなり的事しりて侍ものよひてとはせ侍しかとはかゝしくも申侍らすいとしのひてさ月のころほひよりものし給人なんあるへけれとその人とはさらに家のうちの人にたにしらせすとなん申すときくゝなかゝきのかひまみし侍にけにわかき女どものすきかけみえ侍しひらたつものかことはかりひきかけてかしつく人侍なめり昨日ゆふ日のなこりなくさしいりて侍しにふみかくとてゐて侍し人のかほこそいとよく侍しかものおもへるけはひしてある人ひともしのひてうちなくさまなとなむしるくみえ侍ときこゆ君うちゑみ給てしらはやとおもほしたりおほえこそおもかるへき御身のほとなれと御よはひのほと人のなひきめてきこえたるさまなど思にはすき給はさらんもなさけなくさうくしかるへしかし人のうけひかぬほとにてたに猶さりぬへきあたりの事はこのましようおほゆるものをとおもひをりもしみたまへうる事もや侍とはかなきつゐてつくりいてゝせうそこなとつかはしたりきかきなれたるてしてくちとくかへり事なとし侍きいとくちをしうはあらぬわか人ともなん侍めるときこゆれはなをいひよれたつねよらては

さうくしかりなんとの給ふかのしもかしも人の思すてしすまひなれとその  
なかにも思のほかにくちおしからぬをみつけたらとはめつらしくおもほすなり  
けりさてかのうつせみのあさましくつれなきをこのよの人にはたかひておほす  
においらかならましかは心くるしきあやまちにてもやみぬへきをいとねたくま  
けてやみなんを心にかゝらぬおりなしかやうのなみくまてはおもほしかゝら  
さりつるをありしあま夜のしなされためのちいふかしくおもほしなるしなく  
あるにいとくまなくなりぬる御心なめりかしうらもなくまぢきこえかほなる  
かたつかた人をあはれとおほさぬにしもあらねとつれなくてきゝゐたらむ事の  
はつかしければまつこなたの心みはててとおほすほとにいよの介のほりぬまつ  
いそきまいれりふなみちのしわざとてすこしくろみやつれたるたひすかたいと  
ふつゝかに心つきなしされと人もいやしからぬすちにかたちなどねひたれとき  
よけにてたたならすけしきよしつきてなとそありけるくにの物語なと申すにゆ  
けたはいくつとはまほしくおほせとあひなくまはゆくて御心のうちにおほし  
いつる事もさまくなりものまめやかなるおとなをかくおもふもけにおこかま  
しくうしろめたきわさなりやけにこれそなのめならぬかたわなへかりけるとむ  
まのかみのいさめおほしいていとおしきにつれなき心はねたけれと人のため  
はあはれとおほしなざるむすめをはさるへき人にあつてきたの方をはゐてく  
たりぬへしときゝ給にひとかたならす心あはたゝしくていまひとたひはえある  
ましきことにやとこきみをかたらひ給へと人の心をあわせたらんことにてたに  
かららかにえしもまきれ給ましきをましてにけなきことにおもひていまさらに  
みくるしかるへしと思はなれたりさすかにたえておもほしわすれなん事もいと  
いふかひなくうかるへきことに思てさるへきおりくの御いらへなとなつかし  
くきこえつゝなけのふてつかひにつけたる事のはあやしくらうたけにめとまる  
へきふしくはへなとしてあはれとおほしぬへき人のけはひなれはつれなくねた  
きものゝわすれかたきにおほすいまひとかたはぬしつよくなるともかはらすう  
ちとけぬへくみえしさまなるをたのみてとかくきゝ給へと御心もうこかすそあ  
りける秋にもなりぬ人やりならすこゝろつくしにおほしみたるゝ事ともありて  
おほとのはたえまをきつゝうらめしくのみおもひきこえ給へり六条わたりに  
もとけかたかりし御けしきをおもむけきこえ給てのちひき返しなのめならんは  
いとをしかしされとよそなりし御心まとひのやうにあなかななる事はなきもい  
かなる事にかとみえたりをんなはいとものをあまりなるまておほししめたる御  
心さまにてよはひのほどもにけなく人のもりきかむにいとゝかくつらき御よか

れのねさめくおほししほることいとさまくなり霧のいとふかきあしたいたくそゝのかされ給てねふたけなるけしきにうちなけきつゝいて給ふを中將のおもとみかうしひとまあけてみたてまつりをくり給へとおほしくみき丁ひきやりたれば御くしもたけてみいたし給へりせむさいの色くみたれたるをすきかてにやすらひ給へるさまけにたくひなしらうのかたへおはするに中將の君御ともにまいるしをんいろのおりにあひたるうすものもあさやかにひきゆひたるこしつきたおやかになまめきたりみかへり給てすみのまのかうらんにしはしひきすへたまへりうちとけたらぬもてなしかみのさかりはめさましくもとみたまふ

咲花にうつるてふなはつゝめともおらてすきうきけさのあさかほいかゝすへきとてゝをとらへたまへれはいとなれてとく

あさきりのはれまもまたぬけしきにて花に心をとめぬとそみるとおほやけことにそきこえなすおかしけなるさふらひわらはのすかたこのましうことさめきたるさしぬきのすそ露けゝにはなのなかにましりてあさかほおりてまいるほとなどゑにかゝまほしけなりおほかたにうちみたてまつる人たに心とめたてまつらぬはなしものゝなさけしらぬやまかつもはなのかけにはなをやすらはまほしきにやこの御ひかりをみたてまつるあたりはほとくにつけてわかかなしとおもふむすめをつかうまつらせはやとねかひもしはくちおしからすと思ひもうとなともたる人はいやしきにても猶この御あたりにさふらはせんと思やらぬはなかりけりましてさりぬへきついでの御ことの葉もなつかしき御けしきをみたてまつる人のすこしものゝこゝろおもひしるはいかゝはおろかに思きこえんあけくれうちとけてしもおはせぬを心もとなきことにおもふへかめりまことやかのこれみつかあつかりのかいまみはいとよくあないみとりて申すその人とはさらにえおもひえ侍らす人にいみしくかくれしのふるけしきになむみえ侍をつれくゝなるまゝにみなみのはしとみあるなかやにわたりきつづくるまのをとすれはわかきものとのゝそきなどすへかめるにこのしうとおほしきもはひわたる時はへかめるかたちなむほのかなれといとらうたけに侍へる一日さきをひてわたるくるまの侍しをのそきてわらはへのいそきて右近の君こそまつものみ給へ中將とのこそこれよりわたり給ぬれといへはまたよろしきおとないてきてあなかまどてかくものからいかてさはしるそいてみむとてはひわたるうちはしたつ物をみちにてなむかよひ侍いそきくるものはきぬのすそものにひきかけてよろほひたふれてはしよりもおちぬへければいてこのかつらきのかみこそさか

しうしをきたれとむつかりてものゝそきのこゝろもさめぬめりき君は御なをし  
すかたにてみすいしんとももありしなにかしくれかしとかすえしは頭中将のす  
いしんそのことねりわらはをなんしるしにいひはへりしなときこゆれはたしか  
にそのくるまをそみましとのたまひてもしかのあはれにわすれさりし人にやと  
おもほしよるもいとしらまほしけなる御けしきをみてわたくしのけさうもいと  
よくしをきてあないものこる所なくみ給へをきながらたゝわれとちとしらせて  
ものなといふわかきおもとの侍をそらおほれてなむかくれまかりありくいと  
よくかくしたりとおもひてちいさきこともなどの侍かことあやまりしつへきも  
いひまきらはしてまた人なきさまをしゐてつくり侍などかたりてわらふあま君  
のとふらひにものせんつゐてにかいまみせさせよとのたまひけりかりにてもや  
とれるすまひのほとを思にこれこそかの人のさためあなつりししものしなゝら  
めそのなかにおもひのほかにおかしき事もあらはなとおほすなりけりこれみつ  
いさゝかの事も御心にたかはしと思にをのれもくまなきすき心にていみしくた  
はかりまとひありきつゝしひておはしまさせそめてけりこのほどの事くたゝ  
しければれいのもらしつ女さしてその人とたつねいて給はねはわれもなりのを  
し給はていとわりなくやつれ給つゝれいならすおりたちありき給はをろかにお  
ほされぬなるへしとみればわかむまをはたてまつりて御ともにはしりありくけ  
さうひとのいとものけなきあしもとをみつけられて侍らるときからくもあるへ  
かなとわふれと人にしらせ給はぬままにかのゆふかほのしるへせしすいしんは  
かりさてはかほむけにしるましきわらはひとりばかりそゐておはしけるも思  
よるけしきもやとてとなりになかやとりをたにし給はす女もいとあやしく心え  
ぬ心ちのみして御つかひに人をそへあか月の道をうかゝはせ御ありかみせむと  
たつぬれとそこはかなくなくとはしつゝさすかにあはれにみてはえあるましく  
この人の御心にかゝりたればひむなくかろくしき事とおもほしかへしわひつ  
ゝいとしはくおはしますかゝるすちはまめ人のみたるゝおりもあるをいとめ  
やすくしつめ給て人のとかめきこゆへきふるまひはし給はさりつるをあやしき  
まてけさのほとひるまのへたてもおほつかなくなとおもひわつらはれ給へはか  
つはいとものくるおしくさまでこころとゝむへき事のさまにもあらずといみし  
く思さまし給に人のけはひいとあさましくやはらかにおほときてものふかくを  
もきかたはをくれてひたふるにわかひたるものからよをまたしらぬにもあらず  
いとやむことなきにはあるましいつくにいかうしもとまる心そとかへすく  
おほすいとことさらめきて御さうそくをもやつれたるかりの御そをたてまつる

さまをかへかほをもほのみせたまはす夜ふかきほとに人をしつめていていりな  
とし給へはむかしありけんものゝへむけめきてうたておもひなけるれと人の  
御けはひはたてさくりもしるきわさなりければたれはかりにかはあらむ猶この  
すきものゝしいてつるわさなめりいたいふをうたかひなからせめてつれなくし  
らすかほにてかけておもひよらぬさまにたゆまずあされありけはいかなること  
にかと心えかたく女かたもあやしうやうたかひたる物おもひをなむしける君も  
かくうらなくたゆめてはひかくれなはいつこをはかりとか我もたつねんかりそ  
めのかくれかとはたみゆめれはいつかたにもくうつろひゆかむ日をいつとも  
しらしとおほすにをひまとはしてなのめにおもひなしつへくはたゝかはかりの  
すさひにてもすきぬへきことをさらにさてすくしてんとおほされす人めをおほ  
してへたてをき給よなくなどとはいとしのひかたくくるしきまておほえ給へは  
なをたれとなくて二条院にむかへてんもしきこえありてひんなかるへき事なり  
ともさるへきにこそは我心なからいとかく人にしむ事はなきをいかなる契にか  
はありけんなどおもほしよるいさいと心やすき所にてのとかにきこえんなどか  
たらひ給へはなをあやしうかくのたまへとよつかぬ御もてなしなれはものおそ  
ろしくこそあれといとわかひていへはけにとほをゑまれ給てけにいづれかきつ  
ねなるらんたゝはかられ給へかしとなつかしけにのたまへは女もいみしくな  
ひきてさもありぬへく思たりよになくかたはなる事也ともひたふるにしたかふ  
心はいとあはれけなる人とみたまふになをかの頭中将のとなつうたかはしく  
かたりし心さままつおもひいてられ給へとしのふるやうこそはとあなちにも  
とひいてたまはすけしきはみてふとそむきかくるへきころさまなどはなけれ  
はかれくにとたえをかむおりこそはさやうにおもひかはることもあらめ心な  
からもすこしうつろふ事あらむこそあはれなるへけれとさへおほしけり八月十  
五夜くまなき月かけひまおほかるいた屋のこりなくもりきてみならひたまはぬ  
すまゐのさまもめつらしきにあか月ちかくなりけるなるへしとなりのいゑ  
くあやしきしつのおのこゑくめさましてあはれいとさむしやことしこそな  
りはひにもたのむところすくなくゐ中のかよひも思かけねはいと心ほそけれき  
たとのこそきゝ給ふやなどいひかはすもきこゆいとあはれなるをのかしゝのい  
となみにおきいてゝそゝめきさはくもほとなきを女いとはつかしくおもひたり  
えんたちけしきはまむ人はきえもいりぬへきすまひのさまなめりかしされとの  
とかにつらきもうきもかたはらいなきことも思いたるさまならてわかもてな  
しありさまはいとあてはかにこめかしくてまたなくらうかはしきとなりのよう

いなさをいかなる事ともきゝしりたるさまならねはなかゝはちかゝやかんよりはつみゆるされてそみえけるこほゝとなる神よりもおとろゝしくふみとゝろかすからうすのをともまくらかみとおほゆるあなみゝかしかましとこれにそおほさるゝなにのひひきともきゝいれ給はすいとあやしうめさましきおとなひとのみきゝたまふくたゝしきことのみおほかりしろたへの衣うつきぬたのをともかすかにこなたかなたきゝわたされそらとふかりのこゑとりあつめてしのひかたきことおほかりはしちかきおまし所なりければやりとをひきあけてもろともにみいたしたまふほとなきにはにされたるくれ竹せむさいのつゆはなをかゝる所もおなしこときらめきたりむしの声ゝみたりかはしくかへのなかのきりゝすたにまとをにきゝならひたまへる御みゝにさしあてたるやうになきみたるゝをなかゝさまかへておほさるゝも御心さしひとつのあさからぬによろつのつみゆるさるゝなめりかししろきあはせうす色のなよゝかなるをかさねてはなやかならぬすかたいとらうたけにあえかなる心ちしてそこととりたてゝすぐれたる事もなければとほそやかにたをゝとして物うちいひたるけはひあな心くるしとたたいとらうたくみゆ心はみたるかたをすこしそへたらはとみたまなから猶うちとけてみまほしくおほさるれはいさたゝこのわたりちかき所に心やすくあかさむかくてのみはいとくるしかりけりとたまへはいかてかにわからんといとおいらかにいひてゐたりこの世のみならぬ契なとまてたのめたまふにうちとくる心はへなとあやしくやうかはりてよなれたる人ともおほえねは人のおもはむ所もえはゝかり給はて右近をめしいてゝすいしんをめさせたまひて御くるまひきいれさせ給このある人ゝもかゝる御心さしのおろかならぬをみしれはおほめかしなからたのみかけきこえたりあけかたもちかうなりにけりとりこのゑなとはきこえてみたけさうしにやあらんたゝおきなひたるこゑにぬかつくそきこゆるたちゐのけはひたへかたけにおこなふいとあはれにあしたの露にことならぬよをなにをむさぼる身のいのりにかときゝ給ふ南無富来導師とそおかむなるかれきゝたまへこの世とのみはおもはさりけりとあはれかりたまひて

うはそくかおこなふみちをしるへにてこむ世もふかき契たかふな長生殿のふるきためしはゆゝしくはねをかはさむとはひきかへてみろくのよをかねたまふゆくさきの御たのめいとこちたし

さきの世の契しらるゝ身のうさにゆくすゑかねてたのみかたさよかやうのすちなともさるは心もとなかめりいさよふ月にゆくりなくあくかれんことを女



は思やすらひとかくの給ふほとにはかくもかくれてあけゆく空いとおかしは  
したなきほとにならぬさきにとれるのいそきいて給てからかにうちのせたま  
へれは右近そのりぬるそのわたりちかきなにかしの院におはしましつきてあつ  
かりめしいつる程あれたるかとのしのふくさしけりてみあけられたるたとしへ  
なくこくらしきりもふかく露けきに簾をさへあけ給へれは御そもいたくぬれ  
にけりまたかやうなることをならはさりつるを心つくしなることにもありける  
かな

いにしへもかくやは人のまとひけん我またしらぬ篠の目のみちならひたま  
へりやとのたまふ女はちらひて

山のはの心もしらてゆく月はうはの空にて影やたえなむ心ほそくとても  
おそろしうすこけにおもひたれはかのさしつとひたるすまひのならひならんと  
おかしくおほす御車いれさせてにしのたいにおましなとよそふほとかうらんに  
御くるまひきかけてたちたまへり右近ゑんある心ちしてきしかたの事なども人  
しれす思ひいてけりあつかりいみしくけいめいしありくけしきにこの御ありさ  
ましりはてぬほのくとものみゆるほとにおりたまひぬめりかりそめなれとき  
よけにしつらひたり御ともに人もさふらはさりけりふひんなるわさかなとてむ  
つましきしもけいしにて殿にもつかうまつるものなりければまいりよりてさる  
へき人めすへきにやなと申さすれとことさらに人くましきかくれかもとめたる  
なりさらに心よりほかにもらすなとくちかためさせ給御かゆなといそきまいら  
せたれととりつく御まかなひうちあはすまたしらぬことなる御たひねにおきな  
かゝはとちきり給ことよりほかのことなしひたくるほとにおき給てかうしてつ  
からあけたまふいといたくあれて人めもなくはるくゝとみわたされてこたちい  
とうとましくものふりたりけちかきくさきなとはことにみどころなくみな秋の  
ゝらにていけもみくさにうつもれたれはいとけうとけになりける所かなへち  
なうのかたにそさうしなとして人すむへかめれとこなたははなれたりけうとく  
もなりにける所かなさりともおになともわれをはみゆるしてんとの給ふかほは  
なをかくし給へれと女のいとつらしとおもへれはけにかはかりにてへたてあら  
むもことのさまにたかひたりとおほして

夕露にひもとく花は玉ほこのたよりにみえしえにこそありけれつゆのひか  
りやいかにとの給へはしりめにみおこせて

光ありとみしゆふかほのうは露はたそかれ時のそらめなりけりとほのかに  
いふおかしとおほしなすけにうちとけたまへるさまよになくところからまいて

ゆゝしきまてみえ給つきせすへたてたまへるつらさにあらはさしとおもひつるものをいまたになりし給へいとむくつけしとの給へとあまの子なれはとてさすかにうちとけぬさまいとあひたれたりよしこれも我からなめりとうらみかつはかたらひくらし給これみつたつねきこえて御くた物なとまいらす右近かいむことさすかにいとをしければちかくもえさふらひよらすかくまてたとりありき給ふおかしうさもありぬへきありさまにこそはとをしはかるにも我いとおもひを思ひよりぬへかりしことをゆつりきこえて心ひろさよなとめさましうおもひをるたとしへなくしつかなるゆふへの空をなかくめ給ておくのかたはくう物むつかしと女はおもひたれははしの簾をあけてそひふし給り夕はへをみかはして女もかゝるありさまを思ひのほかにあやしき心地はしなからよろつのなけきわすれてすこしうちとけ行けしきいとらうたしつと御かたはらにそひくらしめてものをいとおそろしと思ひたるさまわかう心くるしかうしとくおろし給ておほとなふらまいらせてなこりなくなりにたる御ありさまにてなを心のうちのへたてのこしたまへるなむつらきとうらみ給うちにいかにもとめさせ給らんをいつこにたつぬらんとおほしやりてかつはあやし心の心や六条はたりにもいかに思ひたれたまふらんうらみられんにくるしうことはりなりといをしきすちはまつおもひきこえ給なに心もなきさしむかひをあはれとおほすまゝにあまり心ふかくみる人もくるしき御ありさまをすこしとりすてはやと思くらへられ給けるよひするほとすこしねいり給へるに御まくらかみにいとおかしける女いてをのかいとめてたしとみたてまつるをはたつねおもほさてかくことなることなき人をしておほしてときめかし給こそいとめさましくつられとてこの御かたはらの人をかきをこさむとすとみ給物におそはるゝ心ちしておとろき給へれは火もきえにけりうたておほさるればたちをひきぬきてうちをき給て右近をおこし給これもおそろしと思たるさまにてまいりよれりわた殿なるとのゐ人おこしてしそくさしてまいれといへとのたまへはいかてかまからんくらうてといへはあなわかくしとうちわらひ給ひて手をたゝき給へはやまひこのこたふるこゑいとうとまし人えきゝつけてまいらぬにこの女君いみしくわなゝきまとひていかさまにせむとおもへりあせもしとゝになりてわれかのけしきなり物をちをなんわりなくせさせたまふ本上にていかにおほさるゝにかと右近もきこゆいとかよはくてひるもそらをのみみつるものをいとおしとおほしてわれ人をおこさむ手たゝけは山ひこのこたふるいとうるさしこゝにしはしちかくとて右近をひきよせ給てにしをつまとにいてゝとをしあけ給へれはわたとのゝ火もきえにけり風す

こしうち吹たるに人はすくなくてさふらふかきりみなねたりこの院のあつかり  
のこむつましくつかひたまふわかきおのこ又うへはらはひとりれるのすい身は  
かりそありけるめせは御こたへしておきたれはしそくさしてまいれすいしんも  
つるうちしてたえすこわつくれとおほせよ人はなれたる所に心とけていぬるも  
のかこれ光の朝臣のきたりつらんはと、はせ給へはさふらひつれとおほせこと  
もなしあか月に御むかへにまいるへきよし申てなんまかて侍りぬるときこゆこ  
のかう申す物はたきくちなりければゆつるいつきくしくうちならしてひあ  
やうしといふくあつかりかさうしのかたにいぬなりうちをおほしやりてなた  
いめんはすきぬらんたきくちのとのゐ申しまこそとをしはかり給はまたいたう  
ふけぬにこそは返いりてさくり給へは女君はさなからふして右近はかたはらに  
うつふしくたりこはなそあなもののくるおしのものをちやあれたる所はきつね  
などやうのものゝ人をおひやかさんとてけおそろしうおもはするならんまろあ  
れはさやうの物にはおとされしとてひきおこし給いとうたてみたり心ちのあし  
う侍れはうつふしくて侍や御まへにこそわりなくおほさるらめといへはそよ  
なとかうはとてかひさくり給ふにいきもせずひきうこかしたまへとなよくと  
してわれにもあらぬさまなれはいといたくわかひたる人にて物にけとられぬる  
なめりとせむかたなき心ちし給しそくもてまいれり右近もうこくへきさまにも  
あらねはちかきみ几帳をひきよせてなをもてまいれとの給れいならぬ事にて御  
まへちかくもえまいらぬつゝましさになけしにもえのほらすなをもてこや所に  
したかひてこそとてめしよせてみ給へはたゝこのまくらかみにゆめにみえつる  
かたちしたる女おもかけにみえてふときえうせぬむかしの物かたりなどにこそ  
かゝる事はきけといとめつらかにむくつけゝれとまつこの人いかになりぬるそ  
とおもほす心さはきに身のうへもしられ給はすそひふしてやゝとおそろかし給  
へとたゝひえにひえ入ていきはとくたえはてにけりいはむかたなしたのもしく  
いかにといひふれ給へき人もなしほうしなとをこそはかゝるかたのたのもしき  
ものにはおほすへけれとさこそつよかり給へとわかき御心にていふかひなくな  
りぬるをみたまふにやるかたなくてつといたきてああ君いきいて給へいといみ  
しきめなみせ給そとのたまへとひえ入にたれはけはひものうとなりゆく右近  
はたゝあなむつかしと思ける心ちみなさめてなきまとふさまいといみし南殿の  
おにのなにかしのおとゝおひやかsherるたとひをおほしいてゝ心つよくさりと  
もいたつらになりはて給はしよるのこゑはおとろくしあなかまといさめ給て  
いとあはたゝしきにあきたる心ちし給このおとこをめしてこゝにいとあやし

う物におそはれたる人のなやましけなるをたたいまこれみつのあそむのやとる所にまかりていそきまいるへきよいいへとおほせよなにかしあさりそこにもものするほどならばこゝにくへきよししのひていへかのあま君などのきかむにおとろくしくいふなかゝるありきゆるさぬ人なりなもののゝたまふやうなれとむねふたかりてこの人をむなしくしなしてんことのいみしくおほさるゝにそへて大かたのむくくしさとへんかたなし夜中もすきにけんかし風のやゝあらくくしう吹たるはまして松のひゝきこふかくきこえてけしきあるとりのからこゑになきたるもふくろうはこれにやとおほゆうち思めくらすにこなたかなたけとおくうとましきに人こゑはせずなとてかくはかなきやとりはとりつるそとくやしさもやらんかたなし右近は物もおほえす君につとそひたてまつりてわなきしぬへしまたこれもいかならんと心そらにてとらへ給へりわれひとりさかしき人にておほしやるかたそなきや火はほのかにまたゝきてもやのきはにたてたるひやう風のかみこゝかしこのくまくしくおほえ給にものゝあしおとひしくくとふみならしつゝうしろよりくくる心ちすこれ光とくまいらなんとおほすありかさためぬものにてこゝかしこ尋けるほどに夜のあくるほどのひさしさは千世をすくさむ心ちし給からうして鳥のこゑはるかにきこゆるにいのちをかけてなにのちきりにかゝるめをみるらむ我心なからかゝるすちにおほけなくあるましき心のむくひにかくきしかたゆくさきのためしとなりぬへきことはあるなめりしのふともよにあることかくれなくてうちにきこしめさむをはしめて人の思いはん事よからぬわらはへのくちすさひになるへきなめりありくゝておこかましきなをとるへきかなとおほしめくらすからうしてこれみつのあそんまいれり夜中あか月といはす御心にしたかへるものゝこよひしもさふらはてめしにさへおこたりつるをにくしとおほすものからめしいれてのたまひいてんことのあるえなきにふともゝのものはれ給はす右近たいふのけはひきくにはしめよりの事うち思いてられてなくを君もえたへ給はて我ひとりさかしかりいたきも給へりけるにこの人にいきをのへたまひてそかなしきこともおほされけるとはかりいといたくえもとゝめすなきたまふやゝためらひてこゝにいとあやしきことのあるをあさましといふにもあまりてなんありかゝるとみの事にはす経などをこそはすなれとてそのことゝもゝせさせんくわんなどもたてさせむとてあさりものせよといひつるはとの給に昨日山へまかりのほりにけりまついとめつらかなることにも侍かなかねてれいならす御心地ものせさせ給ことや侍つらんさることもなかりつとてなきたまふさまいとおかしけにらうたくみたてまつる人もい

とかなしくてをのれもよゝとなきぬさいへとしうちねひ世中のある事とし  
ほしみぬる人こそものゝおりふしはたのもしかりけれいつれもくゝわかきとち  
にていはむかたもなけれとこの院もりなとにきかせむことはいとひむなかるへ  
しこの人ひとりこそむつましくもあらめをのつからものいひもらしつへきくゑ  
そくもたちましりたらむまつこの院をいておはしましねといふさてこれより人  
すくなゝる所はいかてかあらんとたまふけにさそ侍らんかのふるさとは女房  
などのかなしひにたへすなきまとひ侍らんとなりしけとかむるさと人おほ  
く侍らんにをのつからきこえ侍らんを山寺こそなをかやうの事をのつからゆき  
ましり物まきるゝこと侍らめと思まはしてむかしみたまへし女房のあまにて侍  
ひむかし山の辺にうつしたてまつらんこれみつかちの朝臣のめのとに侍しも  
のゝみつわくみてすみ侍なりあたりは人しきやうに侍れといとかこかに侍り  
ときこえてあけはなるゝほどのまきれに御車よすこの人をえいたき給ふましけ  
れはうはむしろにをしくゝみてこれみつのせたてまつるいとさゝやかにてうと  
ましけもなくらうたけなりしたゝかにしもえせねはかみはこほれいてたるもめ  
くれまとひてあさまじうかなしとおほせはなりはてんさまをみむとおほせとは  
や御むまにて二条院へおはしまさん人さはかしくなり侍らぬほとにとて右近を  
そへてのすれはかちより君にむまはたてまつりてくゝりひきあけなとしてかつ  
はいとあやしくおほえぬをくりなれと御けしきのいみしきをみたてまつれば身  
をすててゆくに君は物もおほえ給はすわれかのさまにておはしつきたり人ゝい  
つこよりおはしますにかなやましけにみえさせ給なといへとみ丁のうちに入給  
てむねをゝさへておもふにいとみしければなとてのりそひていかさりつらん  
いきかへりたらんときいかなる心地せんみすてゝゆきあかれにけりとつらくや  
おもはむと心まとひの中にもおもほすに御むねせきあくる心ちし給御くしもい  
たく身もあつき心ちしていとくるしくまとはれたまへはかくはかなくて我もい  
たつらになりぬるなめりとおほすひたくなれとおきあかりたまはねは人ゝあ  
やしかりて御かゆなとそゝのかしきこゆれとくるしくていと心ほそくおほさる  
ゝにうちより御つかひあり昨日えたつねいてたてまつらさりしよりおほつかな  
からせ給大殿のきんたちまいり給へと頭中将はかりをたちなからこなたにいり  
たまへとのたまひてみすのうちなからの給ふめのとにて侍ものゝこの五月のこ  
ろをいよりおもくわつらひ侍しかかしらそりいむことうけなとしてそのしるし  
にやよみかへりたりしをこのころまたおこりてよはくなんなりにたるいま一た  
ひとふらひみよと申たりしかはいときなきよりなつさひしものゝいまはのきさ

みにつらしとやおもはんとおもふ給へてまかれりしにそのいゑなりけるしも人のやまひしけるかにはかにいてあえてなくなりけるをおちは、かりて日にくらしてなんとりいて侍けるをき、つけ侍しかは神事なるころいとふひんなること、思たまへかしこまりてえまいらぬなりこのあか月よりしはふきやみにや侍らんかしらいといたくてくるしく侍れはいとむらいにてきこゆることなどのたまふ中将さらはさるよしをこそそうし侍らめよへも御あそひにかしこくもとめたてまつらせ給て御気色あしく侍りきときこえ給てたちかへりいかなるいきふれにか、らせ給そやのへやらせ給ことこそまこと、思給へられねといふにむねつふれ給てかくこまかにはあらてた、おほえぬけからひにふれたるよしをそうし給へいとこそたいくしく侍れとつれなくの給へと心の中にはいふかひなくかなしきことをおほすに御心ちもなやましければ人にめもみあはせたまはすくら人の弁をめしよせてまめやかにかゝるよしをそうせさせ給大殿などにもかゝることありてえまいらぬ御せうそなときこえ給日くれてこれみつまいれりかゝるけからひありとのたまひてまいる人くもみなたちなからまかつれは人しけからすめしよせていかにそいまはとみはてつやとのたまふまゝに袖を御かほにをしあて、なき給これ光もなくくいまはかきりにこそは物し給めれなかくくともり侍らんもひんなきをあすなん日よろしく侍らはとかくの事いとたうときらうそうのあひしりて侍にいひかたらひつけ侍ぬるときこゆそひたりつる女はいかにとの給へはそれなん又えいくましく侍めるわれもをくれしとまとひ侍てけさはたににおち入あとなんみ給へつるかのふるさと人につけやらんと申せとしはし思ひしつめよとことのさま思めくらしてとなんこしらへをき侍つるとかたりきこゆるままにいとみしとおほして我もいと心ちなやましくいかなるへきにかとなんおほゆるとの給ふなにかさらにおもほしものせさせ給さるへきにこそよろつのこと侍らめ人にももらさしとおもふ給ふれはこれ光おりたちてよろつはものし侍なと申すさかしさみな思なせとかひたる心のすさひに人をいたつらになしつるかことおひぬへきかいとからき也少将の命婦などにもきかすなあま君ましてかやうのことなといさめらるゝを心はつかしくなんおほゆへきとくちかため給ふさらぬほうしはらなにもみないひなすさまことに侍ときこゆるにそかゝりたまへるほのきく女房などあやしくなにことならんけからひのよしのたまひてうちにもまいり給はすまたかくさゝめきなけき給ふとほのくあやしかるさらにことなくしなせとそほとのさほうのたまへとなにかことくしくすへきにも侍らすとてたつかいとかなくおほさるればひんなし

とおもふへけれといまひとたひかのなきからをみさらむかいといふせかるへきをむまにてもものせんと給ふをいいたい／＼しきこと、はおもへとさおほされんはいか、せむはやおはしまして夜ふけぬさきにかへらせおはしませと申せはこのころの御やつれにまうけたまへるかりの御さうそくきかへなとしていて給ふ御心ちかきくらしいみしくたへかたければかくあやしきみちにいてたちてもあやうかりしものこりにいかにせんとおほしわつらへとなをかなしさのやるかたなくた、いまのからをみては又いつの世にかありしかたちをもみむとおほしねむしてれるのたいふすいしむをくしていて給ふみちとをくおほゆ十七日の月さしいて、かはらのほと御さきの火もほのかなるにとりへの、かたなとみやりたるほどなど物むつかしきもなにともおほえ給はすかきみたる心ちし給ておはしつきぬあたりさへすきにいたやのかたはらにたうたて、おこなへるあまのすまゐいとあはれなりみあかしのかけほのかにすきてみゆその屋には女ひとりなくこゑのみしてとのかたにほうしはら二三人物語しつゝわさこのこゑたてぬねん仏そするてら／＼のそやもみなおこなひはて、いとしめやか也きよみつかたそひかりおほくみえ人のけはひもしけかりけるこのあまきみのこなるたいとこのこゑたうとくてきやう、ちよみたるに涙ののこりなくおほさるいりたまへればひとりそむけて右近はひやう風へたて、ふしたりいかにわひしからんとみ給ふおそろしきけもおほえすいとらうたけなるさましてまたいさゝかかはりたるところなしてをとらへてわれにいま一たひこゑをたにきかせ給へいかなるむかしのちきりにかありけんしはしのほとに心をつくしてあはれにおもほえしをうちすて、まとはし給かいみしきこと、こゑもおしますなき給ふことかきりなしたいとこたちもたれとはしらぬにあやしとおもひてみな涙をとしけり右近をいさ二条院へとのたまへととしころおさなく侍しよりかた時たちはなれたてまつらすなれきこえつる人にはかにわかれたてまつりていつこにかかへり侍らんいかになり給にきとか人にもいひ侍らんかなしきことをはさる物にて人にいひさはかれ侍らんかいみしきこと、いひてなきまとひてけふりにたくひてしたひまいりなんといふことはりなれとさなむ世の中はあるわかれといふものかなしからぬはなしとあるもかゝるもおなしのちのかきりある物になんあるおもひなくさめてわれをたのめとの給こしらへてかくいふ我身こそはいきとまるましき心地すれとの給ふもたのもしけなしやこれ光夜はあけかたになり侍ぬらんはやかへらせ給なんときこゆれはかへりみのみせられてむねもつとふたかりていてたまふみちいと露けきにいと、しき朝きりにいつこともなくまとふ心ち

し給ふありしなからうちふしたりつるさまうちかはし給へりしかわか御くれな  
ゐの御そのきられたりつるなといかなりけん契にかとみちすからおほさる御む  
まにもはかくしくのりたまふましき御さまなれはまたこれ光そひたすけてお  
はしまさするにつゝみのほとにて御むまよりすへりおりていみしく御心ちま  
ひければかゝるみちの空にてはふれぬへきにやあらんさらにえいきつくましき  
心ちなんするとのたまふにこれみつ心地まとひてわかほかくしくはさのたま  
ふともかゝるみちにいてくたてまつるへきかはとおもふにいと心あはたし  
ければかわのみつにてをあらひてきよみつのくわんをんをねむしたてまつりて  
もすへなくおもひまとふ君もしゐて御心をおこして心のうちに仏をねんし給て  
またとかくたすけられ給てなん二条院へかへり給けるあやしう夜ふかき御あり  
きを人々みくるしきわさかなこのころれいよりもしつ心なき御しのひありきの  
しきる中にも昨日の御けしきのいとなやましうおほしたりしにいかてかくたと  
りありき給ふらんなけきあへりまことにふし給ぬるまゝにいといたくくるし  
かり給て二三日になりぬるにむけによはるやうにし給うちにもきこしめしなけ  
くことかきりなし御いのりかたくにひまなくのゝしるまつりはらへすほうな  
といひつくすへくもあらずよにたくひなくゆゝしき御ありさまなれはよになか  
くおはしますましきにやとあめのしたの人のさはきなりくるしき御心ちにもか  
の右近をめしよせてつほねなとちかくたまひてさふらはせ給ふこれ光心ちもさ  
はきまとへと思のとめてこの人のたつきなしとおもひたるをもてなしたすけつ  
ゝさふらはす君はいさゝかひまありておほさるゝ時はめしいてゝつかひなとす  
れはほとなくましらひつきたりふくいとくろくしてかたちなどよからねとかた  
わにみくるしからぬわかうとなりあやしうみしかゝりける御契にひかされてわ  
れもよにえあるましきなめりとしころのたのみうしなひて心ほそくおもふらん  
なくさめにもゝしなからへはよろつにはくゝまむとこそ思しかほとなく又たち  
そひぬへきかくちをしくもあるへきかなとしのひやかにの給てよはけになき給  
へはいふかひなきことをはをきていみしくおしとおもひきこゆ殿のうちの人あ  
しをそらにておもひまとふうちより御つかひあめのあしよりもけにしけしおほ  
しなけきおはしますをきゝ給にいとかたしけなくてせめてつよくおほしなる大  
殿もけいめいし給ておとゝ日々にわたり給つつさまのこをせさせ給ふし  
るしにや甘よいとおもくわつらひ給つれとことなるなこりのこらすおこたる  
さまにみえ給けからひいみ給しもひとへにみちぬるよなれはおほづかなからせ  
給御心わりなくてうちの御とのゐる所にまいりたまひなとす大殿わか御くるまに



てむかへたてまつり給て御物いみなにやとむつかしうつゝしませたてまつり給われにもあらぬ世によりかへりたるやうにしははおほえ給ふ九月廿日の程にそおこたりはて給ていいたくおもやせ給へれとなくゝいみしくなまめかしくてなめかちにねをのみなきたまふみたてまつりとかむる人もありて御ものゝけなめりなどいふもあり右近をめしいてゝのとやかなる夕ぐれに物語などし給てなをいとむあやしきなとてその人としられしとはかくい給へりしそまことにあまのこなりともさはかりにおもふをしらてへたて給しかはなんつらかりしとのたまへはなとてかふかくかくしきこえ給ことは侍らんいつのほとにてかはなになぬ御なのりをきこえ給はんはしめよりあやしうおほえぬさまなりし御ことなればうつゝともおほえすなんあるとのたまひて御なかくしもさはかりにこそはときこえ給なからなをさりにこそまきはし給らめとなんうきことにおほしたりしときこゆればあいなかりける心くらへともかなわれはしかへたつる心もなかりきたゝかやうに人にゆるされぬふるまひをなんまたならはぬことなるうちにいさめの給はするをはしめつゝむことおほかる事にてはかなく人にたはふれことをいふもところせうとりなしうるさき身のありさまになんあるをはかなかりしゆふへよりあやしう心にかゝりてあなちちにみたてまつりしもかゝるへき契こそはものし給けめとおもふもあはれになんまたうちかへしつらうおほゆるかうなかゝるましきにてはなとさしも心にしみてあはれとおほえ給けん猶くはしくかたれいまはなに事をかくすへきそ七日〱に仏かゝせてもたかためとか心のうちにもおもはんとの給へはなにかへたてきこえさせ侍らんみつからしのひすくし給しことをなき御うしろにくちさかなくやと思ふたまふはかりになんおやたちはやうせ給にき三位の中將となんきこえしいとらうたき物におもひきこえ給へりしかと我身のほとんどの心もとなさをおほすめりしにいのちさへたへ給はすなりにしのちはかなきものゝたよりにて頭中將なんまた少將にものし給し時みそめたてまつらせ給て三年はかりは心さしあるさまにかよひ給しをこそあきころかの右の大殿よりいとおそろしきことのきこえまてこしに物をちをわりなくし給し御心にせんかたなくおほしをちてにしの京に御めのとすみ侍所になんはひかくれ給へりしそれもいとみくるしきにすみわひ給て山さにとうつろひなんとおほしたりしをことしよりはふたかりけるかたに侍ければたかふとてあやしき所に物し給しをみあらはされたてまつりぬることゝおほしなけくめりしよの人ににすものつゝみをし給て人に物おもふけしきをみえんをはつかしきものにしたまひてつれなくのみもてなして御らむせられた

てまつり給めりしかとかたりいつるにされはよとおほしあはせていよくあはれまさりぬおさなき人まとはしたりと中将のうれへしはさる人やとひたまふしかおとゝしの春そ物し給へりし女にていとらうたけになんとかたるさていつこにそ人にさとはしらせてわれにえさせよあとはなくいみしとおもふ御かたみにいとうれしかるへくなんとの給ふかの中将にもつたふへけれといふかひなきかことをいなんとさまかうさまにつけてはくゝまむにとかあるましきをそのあらんめのとなどにもことさまにいひなしてものせよかしなとかたらひ給ふさはいとうれしくなん侍へきかのにしの京にておひいて給はんは心くるしくなんはかくしくあつかふ人なしとてかしこになときこゆ夕暮のしつかなるに空のけしきいとあはれに御まへのせむさいかれゝにむしのねもなきかれてもみちのやうゝいろつくほどゑにかきたるやうにおもしろきをみわたして心よりほかにおかしましらいかなとかのゆふかほのやとりを思いつるもはつかしたけのなかにいゑはとゝいふとりのふつつかになくをきゝ給てかのありし院にこのとりのなきしをいとおそろしとおもひたりしさまのおもかけにらうたくおほしいてらるれはとしはいくつかものし給しあやしくよの人にゝすあへかにみえ給しもかくなかゝるましくてなりけりとたまふ十九にやなり給けん右近はなくなりける御めのとのすてをきて侍ければ三位の君のらうたかり給てかの御あたりさらすおほしたて給しをおもひたまへいつれはいかてかよに侍らんすらんいとしも人にとくやしくなんものはかなけにものしたまいし人の御心をたのもしき人にてとしころならひ侍けることゝきこゆはかなひたるこそはらうたけれかしこく人になひかぬいと心つきなきはさなり身つからはかくしくすくよかならぬ心ならひに女はたゝやはらかにとりはつして人にあさむかれぬへきかきすかにものつゝみしみんなの心にはしたかはんなむあはれにて我心のまゝにとりなをしてみんなになつかしくおほゆへきなどのたまへはこのかたの御このみにはもてはなれたまはさりけりと思給ふるにもくちをしく侍わさかなとてなくそらのうちくもりて風ひやゝかなるにいといたくなかめ給て

みし人の煙を雲となかむれはゆふへの空もむつまじきかなとひとりこち給へとえさしいらへもきこえすかやうにておはせましかはとおもふにもむねふたかりておほゆみゝかしかましかりしきぬたのをとおほしいつるさへ恋しくてまさになかき夜とうちすむしてふしたまへりかのいよのいゑのこ君まいるおりあれとことにありしやうなることつてもし給はねはうしとおほしはてにけるをいとをしと思にかくわつらひ給ふをきゝてさすかにうちなけけりとをくゝた

りなどするをさすかに心ほすければおほしわすれぬるかと心みにうけ給なやむをことにいてゝはえこそ

とはぬをもなとかとはてほどふるにいかはかりかはおもひみたるゝますたはまことになむときこえたりめつらしきにこれもあはれわすれ給はすいけるかひなきやたかいはましことにか

うつせみの世はうき物としりにしをまたことの葉にかゝるいのちよはかなしやと御てもうちわなゝかるゝにみたれかき給へるいとゝうつくしけなりなをかもぬけをわすれ給はぬをいとをしうもおかしうも思けりかやうにくからすはきこえかはせとけちかくとは思ひよらすすかにいふかひなからすはみえたてまつりてやみなんとおもふなりけりかのかたつかたはくら人の少将をなかよはすときゝ給あやしやかにおもふらんと少将の心のうちもいとをしくまたかの人のけしきもゆかしければこ君してしに返りおもふ心はしり給へりやといひつかはす

ほのかにも軒はの萩をむすはすは露のかことをなにゝかけましたかやかなるおきにつけてしのひてとの給へれととりあやまちて少将もみつけてわれなりけりとおもひあはせはさりとともつみゆるしてんとおもふ御心おこりそあひなかりける少将のなきおりにみすれは心うしとおもへとかくおほしいてたるもさすかにて御返くちときはかりをかことにてとらす

ほのめかす風につけてもした萩のなかはゝ霜にむすほゝれつつてはあしけなるをまきらはしされはみてかいたるさましななしほかけにみしかほおほしいてらるうちとけてむかひあたる人はえうとみはつましきさまもしたりしかななにの心はせありけもなくさうときほこりたりしよとおほしいつるにゝくからすなをこりすまに又もあたたなちぬへき御心のすさひなめりかの人の四十九日しのひてひえの法花堂にてこそかすさうそくよりはしめてさるへき物ともこまかにすきやうなとせさせ給ぬきやう仏のかさりまておろかならすこれみつかあにのあさりとたうとき人にてになうしけり御ふみのしにてむつましくおほすもんさうはかせめして願文つくらせ給ふその人となくてあはれとおもひし人のはかなきさまになりたるをあみた仏にゆつりきこゆるよしあはれけにかきいて給へはたゝかくなからくはふへきこと侍らさめりと申すしのひ給へと御涙もこほれていみしくおほしたれはなに人ならむその人ときこえもなくてかうおほしなけかすはかりなりけんすくせのたかさといひけりしのひててうせさせ給へりけるさうそくのはかまをとりよせさせ給て

なくくもけふはわかゆふしたひもをいつれの世にかとけてみるへきこの  
ほとまてはたゝようなるをいつれのみちにさたまりてをもむくらんとおもほし  
やりつゝねんすをいとあはれにし給頭中將をみ給ふにもあいなくむねさはきて  
かのなてしこのおひたつありさまきかせまほしけれとかことにおちてうちいて  
給はすかの夕かほのやとりにはいつかたにと思まとへとそのまゝにえたつねき  
こえず右近たにをとつれねはあやしと思なけきあへりたしかならねとけはひを  
さはかりにやとさゝめきしかはこれみつをかこちけれといとかけはなれけしき  
なくいひなしてなをおなしことすきありきければいとゝゆめの心ちしてもしす  
りやうのこともすきくしきか頭の君にをちきこえてやかていくたりにけ  
るにやとそ思よりけるこのいゑあるしそにしのきやうのめのとのむすめなりけ  
る三人そのこはありて右近はこと人なりければ思ひへたてゝ御ありさまをきか  
せぬなりけりとなきこひけり右近はたかしこましくいひさはかんをおもひてき  
みもいまさらにもらさしとしのひ給へはわかきみのうへをたにえきかすあさま  
しくゆくゑなくてすきゆく君はゆめをたにみはやとおほしわたるにこの法事し  
給てまたのよほのかにかのありし院なからそひたりし女のさまもおなしやうに  
てみえければあれたりし所にすみけんものゝわれにみいれけんたよりになくな  
りぬることゝおほしいつるにもゆゝしくなんいよのすけ神無月のついたちころ  
にくたる女はうのくたらんにとてたむけ心ことにせさせ給またうちくにもわ  
さとし給てこまやかにおかしきさまなるくしあふきおほくしてぬさなとわさと  
かましくてかのこうちきもつかはす

あふまてのかたみはかりとみしほとにひたすら袖のくちにけるかなこまか  
なることゝもあれとうるさければかゝす御つかひかへりにけれとこ君してこう  
ちきの御返はかりはきこえさせたり

せみのはもたちかへてける夏衣かへすをみてもねはなかれけりおもへとあ  
やしう人ににぬ心つよさにてもふりはなれぬるかなと思つゝけたまふけふそ冬  
たつ日なりけるもしるくうちしくれて空のけしきいとあはれりなめ暮し給  
て

すきにしもけふわかるゝも二みちにゆくかたしらぬ秋のくれかななをかく  
人しれぬことはくるしかりけりとおほししりぬらんかしはやうのくたくしき  
事はあなちにかくろへしのひ給しもいとをしくてみなもらしとゝめたるをな  
とみかとの御こならんからにみんなさへかたほならす物ほめかちなるとつくり  
ことめきてとりなす人ものし給ければなんあまりものいひさかなきつみさりと  
ころなく